福島県現代俳句協会会報

第9号　2021年・冬
編集　福島県現代俳句協会会報編集部　春日　石疼
福島市八木田神明十三の八　090（6220）4757

～第2回県現俳吟行句会～
須賀川に芭蕉の足跡を追う

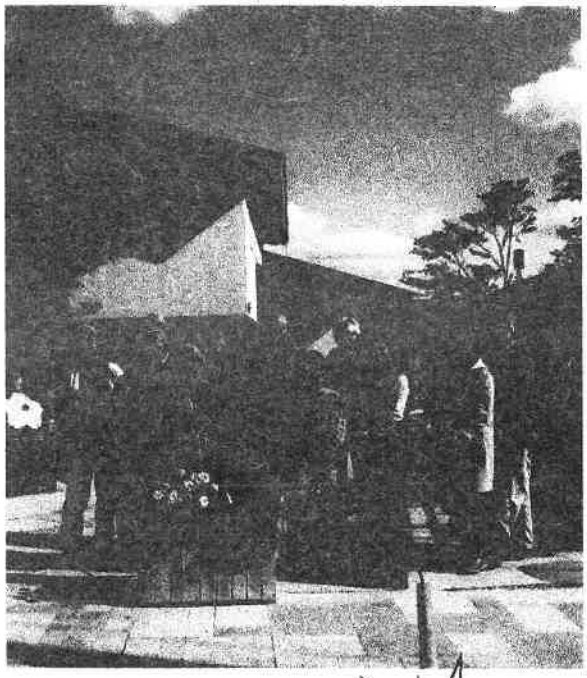
十月二四日、福島県現代俳句協会の第二回目の吟行会が行われた。前日までの寒さと打って変わって好天にめぐまれ、絶好の吟行日和となった。

午前十時、須賀川市役所駐車場に予定通り福島市、郡山市、須賀川市、白河市、三春町の十二名が集合、市役所前の「ウルトラの父」像のにこやかな出迎えを受けた。今年の参加者は昨年より二人増えた。

春日会長の挨拶に続き、幹事が当日の予定などを説明、地元須賀川市の永瀬十悟さんの案内で、さっそく松明あかし会場の五老山に向かった。ここで松明あかしが供養の祭であることなどを解説いただき、つづいて訪ねた十念寺では、江戸末期の女流俳人の市原たよ女が建立した芭蕉の句碑を見学、また伊勢参りの代参の犬を祀った犬塚や昭和の東京五輪マラソンで銅メダルを獲得した円谷幸吉の墓などを拝見した。十念寺は永瀬家の菩提寺であり、幼少から遊び場だったという十悟さんの話は奥深く、多くが句材となった。

次に、日本の滝百選にも選定されている乙字ケ滝をたずね、芭蕉が奥の細道で詠んだ「五月雨の滝降りうづむ水かさ哉」の句碑などを見学、続いて訪れた国指定名勝の須賀川牡丹園では、薄紅葉の日本庭園や牡丹、躑躅の返り花などを句材に句作に取り組んだ。

昼食後、句会場の須賀川風流のはじめ館では、和傘の展示イベントを実施中で、無料の抹茶サービスなども受け、秋麗の一日句材に恵まれた吟行会となった。互選による句会の結果は、宗像眞知子さんが最高点の七点を獲得した。（高市宏　記）



〈主な当日の句は以下の通り〉

杉の実や出水ありたる滝の辺に　高市　宏
秋日傘まわせば遠くなる男　草野志津久
犬塚の犬の目のなき秋土用　大河原真青
石仏の皺のあらはに冬支度　鈴木亜由美
秋深し死に行く蝿は金色に　丹羽　裕子
ウルトラの父秋光を束ねをり　植木　國夫
白鷺の佇ちて定まる滝の秋　永瀬　十悟
龍淵に潜む乙字の左方かな　藤巻　淳
乙字ケ滝の乙どのあたり秋麗　佐川　盟子
風流のはじめに拾う軒の栗　石澤　遥
新松子地球の罅は滝となり　宗像眞知子
墓碑銘は自死と記さず冬隣　春日　石疼

祝
草野志津久さん・正賞
八島ジュンさん・奨励賞
福島県文学賞受賞！

第七十四回福島県文学賞（福島県・福島民報社主催）俳句部門・正賞に草野志津久さん（福島）の『月の暈』、奨励賞に八島ジュンさん（福島）が選ばれました。審査委員の黒田杏子さんは、「女性の哀歓がしずかに深々と表現されています」「突如現れた女性実力派新人作家」とそれぞれの県現俳協会所属の俳句作家を評されています。

会員作品7句

ハレルヤ

佐川　盟子（白河）

巻末に出典ひらく返り花
絨毯干す空のどこかに宇宙船
てのひらを椀のかたちに冬日和
白鳥やこゑハレルヤとハレルヤと
口角のバリウム拭ふ魚は氷に
キッチンの水に一晩飼ふ蜆
封筒に切手四枚夕永し

糸切り歯

草野　志津久（福島・小熊座）

蠅叩きつるして淋し象の檻
秋風や誰にも会えぬ糸切り歯
子に告げず蚊帳吊草に負けしこと
秋薊まわせば首のなるこけし
黍嵐ガトーショコラはとんがって
十月の我とはぐれてみたくなる
雪虫のついてきそうな服買いに

新米

石澤　遥（郡山・芳山／日和田俳句会）

地方紙にくるみ筍送り出す
朝日射し雨後の万緑目を癒す
水脈走る山滴りて波に揺れ
髪切りて薄暑の街を近くする
朝露に光る稲穂の蜘蛛の糸
名月を誘う部屋の酒肴
艶・粘りこれぞ新米香る朝

秋から冬へ

国分　衣麻（須賀川・芳山）

晩秋の光ことりと音の降る
木星も枯れ葉のプールに入るべし
ため息やあわだつ背高あわだち草
錦秋やわが巡礼は途上なり
切つ先の青さ鋭き緋のカンナ
冬コート母の匂いとすれちがう
相聞の比翼のごとく薄氷

鴉

佐藤　保子（福島）

鈍色の寒風裂きて大鴉
葉桜のてっぺん王となる鴉
小春日は不埒な娘ほくそ笑む
そぞろ寒微熱少女の肝の底
大根炊く正しき人であるやうに
白木蓮夭折てふは着地なく
胡坐かく跣のをんな確信犯

沈黙

久保　羯鼓（福島・小熊座／藍生）

トルソーの沈黙葛の葉語りだす
鰯雲胸の奥処の襞と視る
石女の裸身日光に対峙して
野の果の弦月ノアの方舟か
曼珠沙華母声天から降ってくる
月見んと歩めば吾の影連れて
世の憂さは万力となり締める秋

県会員作品一句鑑賞

被曝地やもう愛されぬふきのたう

永瀬　十悟

県会報・第七号「会員作品七句」より。

十二年前の春までは、原始より誰しも当たり前に里曲のふきのとうを摘んではあの香を楽しんでいた。しかし、あの被曝の春から摘む人はいない。

「もう愛されぬ」とせつなくも断定している。

何時になったら摘むことができるのだろうか。平易なことばで原発の危うさを訴えている。

（湯田一秋・会津若松）

ブラインドサッカーの鈴新樹光

阿部　ゑみ子

コロナ禍の中で開催された東京五輪は、制限の中でも多くの感動を与えてくれた。

特にパラリンピックでは、人間の限界の上を行く選手らに終始驚かされた。

ブラインドサッカーは視覚障害のある選手によるサッカーだが、その動きは障害を感じさせない。選手らはボールに仕込まれた鈴の音に集中していく。そしてこの句も「鈴」の一文字に焦点を置く。

季語は新樹光。彼らにとっての美しい光は、確かにそこに存在しているのだ。　（八島ジュン・福島）

私を変えた一句

死と言わず他界と言いて初霞

金子　兜太

兜太先生九五歳の句。

この年『他界』を出版された。

「いのちは死なない、他界に移るだけだ」

「他界には懐かしい人が待っている」

九〇歳過ぎた頃から、病を重ね、親しい方々との別れが続き、ずっと思っていらした「他界」への境地。

今年、会員の御二方がこの世を去った。

メメント・モリ　メメント・モリと粉雪降る

佐藤弘子

再来年の約束だなんて雨蛙

田中雅秀

弘子さん、雅秀さんとは俳句で知り合い、お茶飲み、お喋りと親しくして頂いた。お別れも出来ず、とても切ない日々で、何も手につかない状態でした。

ある日、「いつか、他界で会えるぞ」と兜太先生の声が聞こえてきました。弘子さん、雅秀さんの笑顔を思い出しながら、もう少しこの世で踏ん張ります。

宇川　啓子（福島）

私の好きな季語「冬の朝焼け」

江井　芳朗

俳句では「冬の季語」というと、立冬から立春の間が「冬」となる。そればかりではない。「去来抄」に「不易を知らざれば基（もとゐ）たちがたく、流行を知らざれば、風新たならず」と芭蕉が述べている。「流行」すなわち、現今を詠み生きる「季語」と思われる。必ずしも歳時記掲載とは限らない。従って、私の好きな季語は「冬の朝焼け」である。

慟哭の冬の朝焼け被曝の地　　芳朗

（平成二九年・「寒雷」四月号所収）

私の居住地は、浜通り地方北部にあり、東日本大震災・原発事故から十年経て、しかも、原発爆発地点より２０ｋｍ圏内にあり、他地方への避難を余儀なくされ、家族共々、鹿島中・福島・埼玉県所沢・さらに鹿島千倉仮設へと避難、一昨年の四月、現在の居住地・ふる里への帰還に至っている。

「冬の朝焼け」は東の海の地平線から始まり、茜よりも真っ赤に染めた空、雲であり、赤鬼が踊っているようにも、田圃は一面蘆原であり、原発汚染地の慟哭にも見えた。決してロマンチストにはなれなかった。唯、俳句に親しみ、句作出来る朝の散歩がてらの吟行に唯一の幸せを感じてをり、俳句帳に記入し、忘れ難い光景なので、エッセイとした。

新刊案内

『無音の火』　大河原真青

大河原真青氏は、平成３０年に福島県文学賞正賞を受賞され、「桔槔」と「小熊座」の同人である。氏は、かけがえのない師を二人も持っている。そのお一人、森川光郎先生による帯文では、

野鯉走る青水無月の底を搏ち　　真青

に目を奪われる。「水の香が無類にして無頼」と評されているが、本人を彷彿とさせる。

序文は高野ムツオ先生。真青氏が初めて句会に参加したときの話から、どんどん引き込まれていく。句集は、２０１４年～１９年の三四二句。

はらわたを抜かれし家や春夕焼
沖凪や洞窟（がや）に供へる砂糖水
真葛原けむりのやうに町は消え
窓を打つ火蛾となりては戻り来る
ハムカツに夕陽のにほひ風天忌
七種や膨らみやまぬ銀河系
帰らなん五体投地の尺蠖と
飯舘をいたはる夜の鰯雲

（８／３１読売新聞コラム「四季」に掲載）

カノプスの壺らしきもの襤褸市に
凍餅や第三の火の無音なる

あとがきで、師事する先生の教えが紹介されている。森川先生「俳句は颯爽としていなければならない」ムツオ先生「俳句は孤絶の営みだ。抽象に走るな」装丁も含めて、まるごと一冊ずしんとくる句集である。

（阿部ゑみ子）

前号会報より

この句がよかった！

斎藤秀雄

黒人霊歌土鳩が睦みあう陽炎　　五十嵐　進

アメリカの奴隷制時代にルーツをもつ黒人霊歌。Spirituals の通称通り、魂を震わせるように、地響きのように、どこからか聴こえてくる。仲睦まじい鳩たちは陽炎に揺らめいていて、幻のようだ。惑星の全域で、レイシズムへの抵抗はつづいている。

蔓薔薇の捉へ損ねしものに空　　鈴木満喜子

蔓薔薇はあらゆるものを捉える。家の壁、アーチ、棚、フェンスなど。人の目も心も捉える。捉えられないものなどないかのように。けれど空だけは捉えそこねてしまう。空へ向かって成長してはいるのだが。アーチに絡む蔓薔薇越しに、青空が美しい。

夕立の名残にあそぶ雀かな　　鈴木亜由美

夕立が激しく降った。そして去った。何事もなかったかのようだが、その気配を残していった。ひとときを雨宿りして声をひそめていた雀たちも姿を現して、もう雨は降っていないことを確かめるように、気配のなかで鳴き始めている。

青梅雨を貫きて磴尊徳廟　　小幡　テイ

相馬市西山の愛宕山史跡か。石段を登ると拝殿があり、裏へ回ると墓がある（尊徳の遺髪を葬ったもの）。夏のはつらつとした青葉に、梅雨季の長雨がふりそそぐ。石段はどっしりと受けとめるように、自然のなかを貫いている。石段も青葉も力強い。

天井墜ちそうきっと死ぬ春の地震　　丹羽　裕子

天井が落ちてきて、きっと死ぬ、と思った。が、こう書けているということは、死ななかったのだ。あのとき、真剣にそう思ったのはれっきとした事実。語順が秀逸であろう。体験の順番で、リアルな「いま」の連続で書かれている。

葉桜や問診票に少し嘘　　唯木イツ子

問診票（予診票）の質問は、細かくてしつこい。「今日、体に具合が悪いところがありますか」なんて聞かれても、毎日どこかしら調子は悪いに決まっている。「いいえ」にチェック。葉桜のようにすがすがしく、ちょっとした嘘をついてみるのだ。

《編集後記》

早いもので、今年最後の 会報 となりました。皆様のご協力あってのことと感謝申し上げます。皆様からのご意見、ご提案をお待ちしております。（E）